

低き聲 : 文苑

著者	天山, 夕闇, 夕陽
雑誌名	龍南會雜誌
巻	107
ページ	35-43
発行年	1904-10-28
その他の言語のタイトル	低き聲 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5712

文苑

低き聲

天 山
夕 關
夕 陽

風のさぐめき水のせくらぎ、よまその聲の如何にひくくとも、まばし聞かずや、そはいつはまなき自然の聲あると。

(その一)

ふるさを跡にして小鯛波におどる楠久の津にあり。こゝについて夕榮の色水にてりそふを見しはたゞひとたび、さなり『かなたは西よ』と叫びたかりしも、君ます方は、稻風の音さやけき託麻の原は、ひむがし眉山のあたりなりき。

君よ、西のみ空にあたりてしたひにしたふ一人の戀人あらば、夕ぐれの思ひは如何に清かるべき。五彩燦然として煥發する暮雲の影蘇々たる太洋のおもてに波うつ時、人なき渚にのみ、あらむかぎりの聲をしぼりて戀人のみ名よばはらば『夕ぐれ』のゆかしさ如何ばかり身にしまむ。世の汚塵にみだれし小さき胸の如何に清き心地ならむ。さはれ君よ、筑紫の濱邊に色よきくわし女はさはながら、誰一人われ慕ふ少女はなき身なるを、幸なきわれは誰をしも戀ひむ。此幸のわが頭にやどらむ

時のありやなしや。(七月二十七日、天山より、夕陽兄に)

(その二)

おとらるはしの山や、河や、青葉の森や、思ひ出多き故國の自然は如何に多くの同情を以て、わかき御身をむかへまつらむか。夕風清き海べに立ちて遙かに夕陽の美を眺めやりつゝ、さるる神に入る君が面影、今ぞありくと見ゆるぞかし。

文

それよ、『西のみ空にあたりて慕ひに慕ふ一人の戀人あらば夕ぐれの思ひは如何に清かるべき』。清らむ、げに清からむ。されどうらめしき世のさがは、その美はしき心をだにむくつけき土足にかけ、ふみにちりかいくづすを如何にせばや。『あはれ天の靈光神の呼吸として美を讚美すること能はざる世に生れし吾等が不幸は、むしろ海を踏むでトリトンの笛の音を聞かんとかこちし詩人のうらみにもやくらふべけむ』と嘆きけむ、逝きし博士の今さらには偲はるゝかな。(七月三十日、夕陽より、天山兄に)

(その三)

苑

浦曲の松風身にるにし薄うして、はや再び稻の蒼なみなみの色さやけきはとり、夕雲のあやながむることゝはなりつ。

ゆふべとゞきし一封の書信よ、ひらきみるかひなよりわなゝきは全身に傳はりて眼の色うるみぬ。ひとりひそかに家を出づ、足の音かすかなりき。袖二つにつゝみかねし思ひ深くれさへて、ひむがし祇園の川原にをむ。

Who never ate with tears his bread,

and through the long-drawn midnight hours

Sat weeping on the lonely bed,

He knows you not....."

世の俗塵の子に耳からひ我身ならず、たゞしばらくをきよたまへ。

星影はるかなるみ空にゐますてふ天地のみたまよ、などか六合のうち生きとし生けるものに生命をさづけたまひし。

おもふに畢竟生命とは苦痛のかり名に過ぎざりけりな。よしそこに希望と快樂とありと説き玉ふか、快樂とは苦みのきづなしばらくゆるみたる姿、のぞみどはそがゆるまむ前つかのまの有様なり。これあるはたま／＼もてわが言のあかしとすべからずや。野べの草木のたねすゆらぐは、荒海の大波とはに岩ほにむせぶは、いづれかこれつぎざる苦のすがたならざるべき。

したはしきは大静寂のすがたなるかな。生をうけて五十年、朝な夕な、かたちなきおほむちにむちうたれて、痛苦の間にさまよひ、みそらのみたまはこれに限りなき樂を感じて、やがてそのむくいとして碑下三尺棺底冷なる眠をゆるし玉ふ。したはしきは苦なき大静寂のすがたなるかな。

はかなき思にかきくれてひとりイむ長堤の末、流星一閃光芒長くひいていくの里にやゆきし。(八月三日、天山より、夕陽兄に)

(その四)

稻の蒼なみなみの色さやけきほとり、夕雲のあやを眺むる若き子の、みんなみはるかのこなたの野邊にもありけるよ、ゑにしはいづれをなじ世のすがたなるかな。

君よ、如何にせむ、もろ共に美はしき理想の影を求めてたましひは空ゆく雲の自在の翼にかけるめれど、この身は遂に現實のものなるを如何にせむ。かくて世のさがはあらゆる美とまほろしとを嚴めしき現實の名の下に踏みにちりぬ。げにや現實の世に夢を慕ふ青春の子等はわざはひなりき。たのしきなやみのとこしへにこの胸をさることなくて、わが世の春は暮れてゆくよ。

かくてもわれ等は幸なりき。そは生ける天地のすがたを見ることを得べければなり。それよ、おもひある眼に映する天地の姿のいづれか思想おもひなからずやは。ゆふ蟬の彼方の森になきかはす聲、淺川の此方の岸にさくやく響ひびき、あはれそこにはつきせぬ天地の生命いのちのやどらすやは。

をどつ日の夕べ、われ一人家を出でゝささら波立つ野川のほとりに佇みぬ。いみじう星の飛ぶ夜なりし。天上の星と下界の露と、ろは暗黒の夜の世界にまたよく唯一の光なりき。されどろの光のなと弱かりし。またよきか、そはためらひの相にはあらじか、さるにてもわれはよわきろの光がどこしへの生命の活現なることを感じて喜びぬ。かくてその夜わがすすびし笛の音は、ろのひかしリユカディアの海にひびきりしリーラのろれもに似たらむかと、われながらうるはしかりき、清かりき。

(八月五日、夕陽より、天上克に)

(ろの五)

こよひは星流るゝ夜なるかな。君よ、われはこよひひそかに自然のさくやぎを胸に得て、ひとり筑

紫二郎のほどもにさまよひつゝあるなり。そはわがふところの詩卷につたなき詩の數をまさむがためにあらず。君よ、知らずや、自然詩人の興趣最も深きときは、満足なる詩を得たる曉にあらずして、たゞ自然の崇美を感愛したる一瞬、未だ已れのペンを顧みざる時に存するを。北天遠く見やるかなた極星嚴としてみすまるの玉をとり、七星曲折を變せせしてそをめぐるところ、あゝ何等の威嚴ぞ。小さき人の子のペンに詩を強ふるの愚をさとり得たるわれは、露ふかき草にいねてたゞ感興をほしいまゝにするのみ。

水色暗膽たり。さゝやぎは草上の露にひゞく。夜はふけたり。さらば立たむ。

月いまだのぼらず、天はたゞ白し、地はたゞ黒し。それよ劫初の姿にも似らむごときこの夜、森かげの君に默想はおはさすや。(八月五日夜、夕闇より、夕陽兄に)

(その六)

訪づれせざりしことの久しうなりぬ。ゆるしたまへ。よべは七夕たなばたの夜なりし。われひとり涼臺にもたれてみ空の方を眺めやりしが、折からあやしの風吹き出でゝ空にはいまはしの雲たてり。天の河原に波風さわぐ、涙にたへぬたなばた姫のみ姿はあはれや雲にかくれて見ゆすなりぬ。牽牛こなたの岸にたゞすみて愁念にわたへぬ様。おゝ雨よ降らでもあれな。おゝ風よ吹かでもあれな。年に一度のあふせと云ふを。

雲は一面にひろごれり。風のこゝちもものすどく、蟲はまた一しきり遠く近くにしのびなきぬ。

文

君よ、わすれてありき。われはこのごろ机上に一人の友を得たり。そは若きヴェルテルにぞある。久しく『論語』と『英雄崇拜論』^{ヒーロウナルシツ}とに寂寞たりしわが机上、ここに新らしき友を得たるは吾れの喜ぶどころなり。君よ奇しき三人^{サタリ}の人物の會合を思ひぬ。孔子、彼は淑徳仁義世界を蓋ふの聖者にあらすや。カーライル、彼は意氣情熱天をつくの論客にあらすや。而じてヴェルテル、彼はどらへがたきまばるしの影を求めて戀に泣くの詩人にあらすや。予は等しく三人に感ず、予は三人とも同じく『人』なりければなり。

一は道徳の人なりき。一は信仰の人なりき。而して一は狂戀の人なりき。而も予はその一をだに捨つること能はざるなり。君よ、道徳を取りて戀を捨てむどの玉ふか、あゝわれまた何をか言はんや。哲人すなはち教へて曰く、『理性の命にこれ従へ、理性は人生最高善の支配者なればなり』と。人は喜んでその教へに従ひぬ。詩人すなはち歌うて曰く、『美はしき哉、感情の流れの潺々として岸の小花を洗ひゆくところ、あゝそこにはつきせぬ神のなさけのこもらずや』と。人はまた喜んで詩人の言を讚美しぬ。かくして人は生れながらにして二つのものを身に持ちぬ。果然、予は水と火となりき。

あはれなる者よ、神は何が故に人の子に理性と感情とを與へ、戀と道徳とを教へ給ひけむ。あゝかくして彼れ等は遂に煩悶の子たらざるべからざるか。

『人とはるも何ぞや。半は神に等しと云ふぞをかしき。要あるべどころにも力なきにあらすや。あはれは歡喜に躍る時、あるは憂苦に沈む時、再び無味冷靜の意識に歸るべき時も、將た充ち滿ちた

る無限の中に消へ入らむと憧るゝ時も、共に踏み耐ふること能はざるにあらずや。』(ヴァエルテル
)—天隨氏のヴァエルテル譯より—(八月十八日、夕陽より、天山兄に)

(その七)

あやしの雲はつひにさわがしの風となりて、昨日は暴風天地にあれすさびぬ。いまはしかりしこと
 よ。

けさしも空は鏡のやう、ひむがしの峯に雲ちぎれて、あけの色をぐらき木立にかよひ、神の森とみ
 に生氣を帯びぬ。心地よきあけぼのの眺めや。平和なる天地の姿や。あはれ昨日はあめつちもくだ
 けよとばかりわれ狂ひし風の神、うもいづくへか姿をかくせし。見よ生ひ茂る老樹の梢に黎明の色
 うるはしく、群鳥かたみのねぐらを出て、歡樂の歌を唱ふるにあらずや。

われかつて人生の波風多きを觀じてかなしみぬ。されど今にして思ふ、うはむくつけき命運のしば
 しのたはぶれにすぎざるを。苦しみと云ふか、悲しみと云ふか、されどそはねがはしき平和の前驅
 にすぎず。今さらに人のさだめをわれ嘆かんや。

げにや最も静穩なる天候は暴風雨の翌日なりけり。さらばおと雨よ降れ、風よすさべ。されど吾等
 をして吾等の路を辿らしめよ。(八月二十一日朝、夕陽より、夕闇兄に)

(その八)

君よ、わがたよりのあまり遅かりしをどがむる勿れ。七夕の前の日、人は天上二星の美はしき戀を
 待ちつゝある時、我が老祖母はどこしへの眠につきたりし也。七十餘年の長き世の路を歩みたりし

祖母は、日影あひかなる命の夕べをさばかりにかこたざりしなるべし。蓮華のうてなをひたすらに慕ひたりし身には、情せまりたるわれ等の涙、さても何と見ゆし。さるにてもあとに残りし悲みの子は、世のすべてをたぐひ運命なりと観する天山の君の、いかに心肥わたるかを羨まざるを得じ。

三日の墓詣でを終へしあけの日の夕べ、長き看護のつかれを醫すべくわれは河岸に出でぬ。君よ、河風にはすでに秋の聲ありき。星はすでに淋びの色を示したりき、憂愁の矢に心をいためし人の子の、如何に涙にもろさかを知り給へる君は、まだ幼なき秋の影にだに、わが小さき胸はたぐす涙の歌をひかすをきき得給ふなるべし。彼の世此の世のかよひ路なる賞罰の森かげを、たばつかなくもたどりゆく祖母にくしき冥福あらむを祈るにも、わが手、わが口うれひにわななくき如何にせむ。君よ、黙想につかれて、夕べの森に夢み給はむ時、ひくきささぐやぎをきき給ふこともあらば、ろはわが胸のひくきと知りたまへ。

すべてのよるこび悲みをも拂ひつくすべき暴風あらしの日も過ぎてはや四日、月と風とは夕ぐれ殊に清かれど、許せ、なほ君に送るべきは悲みの筆のあとぞ。

けふは于蘭盆の十四日、よべの月明に乗じて、祖母の精霊は再びわが家を訪づれしなるべし。(八月廿四、夕闇より、夕陽兄に)

(その九)

許し玉へ、たどづれをこたりしことの久しくもありしかな。稻のあを波いまは野べにしきつらねた

も琥珀と見るまで色かはりぬ。

清けき枕の上に新らしき友を得玉ひしどか、しかしてその名はヴェルテル。

みくらにはかゝやく星あり、蒼茫かぎりなきあらうみの底にはあやうるはしきまたまあり。されど人の子にはさらにうるはしき戀あり。さなりこはさるうたびのことばなりき。さばれ渾沌として鶏子のごとく、天地のいまだわかれざりしよりこのかた、あゝ如何なる人か燦として夜天の宿にかをりみなぎる花林にわけのぼりて、その一枝をしも下界にもたらし來りし。はるけきくゝあをうなばらの水底に、龍神のみどのかざれるまたましら玉さぐりよらむは、つねに人の力に及びがたかることのためしには用ひらるゝならはしぢらしか。人の心の奥深く秘められて、清けくうるはしき戀は存せざるにもあらざるべけれども、思ふにみづから親しくを得たらむ人ありや。われこそと答ふらむ數多の人々よ、あはれむべきかなが得ぬと思へるは、たゞその幻影にすぐることあらじ。みそなはせ、かがやく星のもとには渺々としてきはみなきみそらをたゞへ、さらめくまたまの上にはまん／＼としてかぎりなき大海わたつかを浮べましたる大なるみたまは、戀人の戀とわれとの間に、道德と名譽と利益と、その外あらゆる障礙のあまたをならべたまひしなり。

君よ、塵多き、烟筒くすぶるこの地の上、かくて、ヴェルテルの聖戀は遂に成就すべきにあらじ。ならざるものを望んで、いにしへ海をふむでトリトンの笛の音もとめけむうた人のなげきくり返さむより、願はくば戀をしらざるしれものたらむかな。(九月五日、天山より、夕陽兄に)

(完)